

西暦	アプローチ (AP)	人物	手法	キーワード	基礎理論
1910 ソーシャル・ケースワークの体系化 (リッチモンドによりスペシフィックな専門的体系が述べられた)					
1910	治療モデル	リッチモンド	治療モデル (COSの活動を通して発展)	1917年「社会診断」 1922年「ソーシャルケースワークとは何か」	社会的治療・社会的診断
1920	診断主義AP	ハミルトン トール	医学モデル (治療モデル)	援助者主導の長期的援助、心理的側面に焦点をあてる 本人の状態に生活問題の原因があるという考え	精神分析論 (フロイト) 社会診断 (リッチモンド)
1929 ミルフォード会議報告書→スペシフィックから、ジェネリックへ、ソーシャルワークの重要性が述べられた					
1930	機能主義AP	タフト ロビンソン	ワーカーの「所属機関の機能」を活用	診断主義APの批判により誕生	意思心理学 (ランク)
1955 全米ソーシャルワーカー協会が結成され、更に統合化の流れが進む					
1957	問題解決AP	パールマン	クライアント自らが問題解決者とする 4つのP→6つのP(※1)	ワーカビリティ (問題解決能力) を重視 部分化の技法(※2)、役割理論	診断主義APと機能主義APの折衷アプローチ
1960	実存主義AP	クリル	他者とのつながりで「疎外感からの解放」	自らの存在意味を理解	実存主義
1960	家族システム	ハートマン	家族を一つのシステムと捉える	原因と結果の円環的な循環 (サーキュラーな視点)	システム理論、家族療法
1960	危機介入AP	ラポポート	「危機」に介入、対処能力の獲得、回復に焦点	迅速で短期集中的な介入	発達理論、危機理論
1965	心理社会的AP	ホリス	「状況の中の人」と捉える	診断主義アプローチを継承、転移や逆転移などの概念	精神分析論 (フロイト)
1967	行動変容AP	フィッシャー	強化による行動変容によって適応行動を増やす	オペラント条件づけ (スキナー, B.F.) など	学習理論
		トーマス バンデューラ	モデリング (観察学習) (※3)	セルフエフィカシー (自己効力感) が喚起される(※4)	観察学習理論
1968 シーボーム報告→あらゆるクライアントを統合的に処遇出来るソーシャルケースワーカーの必要性が述べられた					
↑モダニズム (近代化: 伝統的なケースワークである長期援助の考え方が主流)					
↓ポストモダン (脱近代化: 長期援助の批判から短期間の計画的援助が主流となっていく)					
1970 「ソーシャルワーク実践の共通基盤の提唱 (価値、知識、介入が共通した構成要素である)」 byバートレット					
1972	課題中心AP	リード エプスタイン	クライアント自らが課題を設定 決められた時間内で (短期)	心理社会的AP、問題解決AP、行動変容APの統合により派生 (伝統的な長期処遇への批判から派生)	精神分析論、役割理論、 学習理論
1976	エンパワメントAP	ソロモン	潜在能力に気づいて対処能力を高める ストレングスの重要性に着目 (例: SST・社会生活技能訓練)	「抑圧からの解放」 「黒人のエンパワメント」 1960年代の米における公民権運動などが源流	ソーシャルアクション
1980 システム理論 (人と環境の相互作用として捉える)、エコロジカルソーシャルワーク					
1980	解決志向AP	バーグ	クライアントの「解決出来たイメージ」を重視	ミラクルエクション→奇跡が起き問題が解決した場面を想起	ブリーフセラピーの技法 (短期療法)
		シェザー	クライアントのリソースを活用 決められた時間内で (短期)	例外探し→例外的に上手くいった状態をもとに解決 スケリング エクション→現状や見通しを数値により自己評価	
1980	フェミニストAP	不明	エンパワメントアプローチの女性版		フェミニズム
1980	エコロジカルAP	ジャーメイン	「個人と環境の相互作用」に着目 (生活モデル)		システム理論 (生態学の概念)
		ギッターマン			
1980	ストレングスAP	ラップ	自身の強みや有する資源に着目	人は立ち上がる回復力を有する 精神障害者における社会資源を「オアシス」と名付けた	
		ゴスチャ	精神障害者のストレスマネジメントとして発展		
1990	ナラティブAP	ホワイト	クライアントの語る「ストーリー」を重視	書き換え療法では、ドミナントストーリー(※5)をオルタナティブストーリー(※6)に書き換える	物語理論
		エプストン			
1990 ジェネラリストソーシャルワーク (ケースワーク、グループワーク、コミュニティーワークの統合化)					

※1、4つのP・・・Person (人)、Problem (問題)、Place (場所)、Process (過程)、+②6つのP・・・Professional (専門職)、Provisions (制度)

※2、部分化の技法・・・原因となっているストレスを細分化させ、小分けされた困難な問題に対して成功体験を積み上げる事で問題解決の強化を図る。

※3、モデリング (観察学習)・・・モデルの行動を観察するだけで成立する学習の事。

※4、自己効力感 (セルフエフィカシー)・・・行動についての情報が伝達される事で、自分がどの程度うまく行けるかという個人の確信の程度。

※5、好ましく無かった自己物語 ※6、利用者本人が生きやすい新たな物語

医学モデル

システム理論

生活モデル

ストレングスモデル